　若い女教師の自宅に毎晩のように札つきの不良生徒が訪れてくる。今夜も玄関のチャイムが無情に鳴った。浅川真由美は、長いまつげを震わせ、憂いの色をみるみる濃くした。

「ああ、こんなことってないわ･･･つらい･･･」

泣き出しそうな声で嘆く女教師は、透明感のある抜けるような白い肌をもった目鼻立ちのはっきりとした美しい女だ。

「･･･あなたを守ることができない･･･わたしはだめな母親」

　母の言葉を背中に訊きながら、真由美は玄関に出てドアのロックを外した。

「先生よお、おせえじゃねえか！」

いつまで外で待たせるのかと荒木一馬は大きな体躯を揺らしながらのっそりと入ってきた。玄関に入るや、いきなり女教師の臀部をスカート越しにスパンキングした。臀丘を叩く手つきは手慣れたものだ。何度もこの美しい女教師に尻叩きをしていることが分かる。

　大きな手の平が何度も真由美の臀部を叩く。ビシッビシ

ッとスパンキングの乾いた音が玄関に響き渡る。真由美は、母親に聞かれまいと唇に手を当てがって悲鳴を堪えたが、くぐもった呻き声がどうしても漏れ出てしまう。それだけ一馬の大きな体躯から繰り出される平手打ちの衝撃は強烈なのだ。叩かれるたびに真由美のすらりとした体が揺れる。

女教師は細身だが、それは小さな顔とすらりと伸びた四肢が細身を印象づけているのであって、衣服の上からでも乳房は豊かに盛り上がっていることが分かる。叩かれている臀部もむっちりと丸みがあり、肉付きがよい。スタイルのよい美しい女だからこそ、不良学生に目をつけられ、レイプされたのだ。きっかけはおとなしい学生からの相談に応じたことからだった。誰にも聞かれたくないからと、その学生は校舎の最上階の特別教室を相談場所に指定してきた。真由美はなんの不信感も抱くことなく、階段を上がり、学生が指定した特別教室に向かった。その学生はいじめられている気配が以前からあった。暴力を振るっているのは不良学生のグループではないかと思っている。教師として、その学生を救うことに使命感をおぼえていた。しかし特別

教室で待っていたのは、不良グループのボスだった。真由美は校舎の中で暴力的にレイプされたのだ。その時点で警察に通報すればよかったが、大きなショックを受けた真由美は、何もできなかった。それをいいことに不良学生は真由美を餌食にし続けているのだ。真由美はずるずると体を許してきた。

　玄関でのスパンキングは何度も何度も続けられ、美しい女教師の双臀は衣服の下ですでに真っ赤に色づいていることだろう。

「も、もう･･･ゆるして･･･」

尻叩きをやめてほしいと懇願する真由美は気弱な表情だ。この気弱さが悲劇を招いたと言えるだろう。

「ふふふ、もう十分なのかい？尻打ちも好きにならなくっちゃあな。こんなに叩きがいのあるむっちりとした尻だからよお。おれのお気に入りの尻だぜ」

一馬は、にやりと不敵な笑みを浮かべながら十分に叩いた女教師の尻肉を、円を描くようにやさしく撫でさすった。

そして真由美の細腰に手を回しながらぐいっと引き寄せ、唇を奪う。真由美の口腔に舌を入れるディープなキスだ。真由美は口を素直に開け、舌を受け入れた。拒めば、一馬に暴力を振るわれる。それは心底怖かった。頬を叩かれると、気弱な真由美は従うしかなかった。

真由美は臀部を抱かれながらリビングに入った。自分の女だと言わんばかりの一馬の振る舞いだ。実際、真由美は連日のように体を許している情婦に成り下がっていた。教師と生徒の関係ではなくなっていた。

一馬は、母親の美和の眼の前で真由美の細腰をさらに抱き寄せ、唇を吸いつつ、柔らかな乳房や臀を衣服の上から揉んだり撫でたりする。臀を撫でていた手は双臀の狭間にもぐり込む。

「ううっ」

真由美の眉間がゆがむ。アナルゾーンを無造作に嬲るのだ。

母親の美和は顔をそむけたままだ。その表情は今にも泣き出しそうだった。身体をいいようにいじられる真由美は、

唇を吸われたまま逆らうそぶりを一切見せない。一馬の暴力に屈しているだけではなかった。おびただしい枚数を撮られている恥ずかしい画像にも屈服しているのだ。特別教室で陵辱直後の穢された裸体を撮影された。その他にも真由美を服従へと縛り付ける画像は多々ある。下着姿の画像は、股間の布地がはっきりと濡れていた。バイブを仕込まれたまま授業をし、その後トイレの中で撮影された恥辱の画像だった。乳房も下半身も剥き出しの全裸に剥かれた恥辱の画像さえ何枚もある。股間を隠すことも許されず、両手を頭の上に置いた恥辱の姿勢で前からも後ろからも撮影された。排尿を強要された姿でさえ真由美は撮影されていた。それらの画像を見せられるたびに真由美の抵抗する気力は消えさり、言いなりとなっていった。

　それは母親の美和も同じで、最愛の娘の恥辱の写真を突きつけられると、世間への流出を恐れ、娘が陵辱され続けるのを黙って見ているしかなかった。母娘が住む家は、不良学生に土足で踏み込まれ、思うがままに蹂躙されているのだ。

「おい、酒だ」

と言われれば真由美はすぐに酒を出す。少しでも遅れれば平手打ちが飛んでくる。

「煙草」

と言われれば煙草を出し、教師としての矜持をこなごなに粉砕されながらライターで火をつけた。暴力と恥ずかしい写真に屈服していた。

「脱ぎな」

酒を飲み、くわえ煙草の紫煙をゆっくりと吐きながら命じる一馬は、真由美と母親の美和を交互に眺め、不敵な笑みを浮かべている。美和の表情は終始険しい。憤怒の感情を隠すことなく、一馬をにらみつけている。年増だがすこぶる美しい女だ。磨かれた美しさが自然とにじみ出ている女性だ。真由美と並んで歩けば姉妹とまちがえられそうなみずみずしい肌だ。

「あなたは悪魔よ！」

美和の瞳に怒りの色がありありと浮かんでいる。抑えきれない感情が高ぶる。その顔は美しいがゆえにすごみがあっ

た。

「ふふふ、悪魔と言うのかい。そうだな。俺は悪魔だよな。そしてこの家は美しき生贄の檻なのさ。お前たちには同情するぜ。だからよお、いやならさっさと警察に行ってレイプされたことを詳しく話してきな。よかったらあのレイプされた写真のコピーを渡すぜ。ザーメンで汚されたあそこがばっちりと写っているからよお、それを警察に持っていくといいさ。」

不良生徒はどこまでもふてぶてしい。

「そんなことできないわ。できるはずがないでしょ。あなたは卑怯です。女性を力尽くで押さえ込み、弄んで楽しんでいる卑劣な男です。」

美和は強い口調でののしった。感情の高ぶりを押さえきれない。

　すっと立ち上がった一馬の平手打ちが一閃した。乾いた音と同時に悲鳴が上がる。母親の美和の体躯がソファに横倒しになった。打たれた頬を白い手で押さえている美和の口元が切れたのだろう。一筋の血が流れていた。

「やめてっ！」

そう叫んだ真由美は、ブラウスのボタンにすばやく手をかけた。

「あなたの言うとおり、脱ぎますから･･･母に暴力を振るうのはやめて」

「真由美さん、私はいいの。あなたをこれ以上惨めにさせたくない。母親として･･･あなたを守りたいの」

頬を押さえたままの美和は泣き声だ。

「お母さま、わたしの身体はもうすっかり穢れています･･･」

最愛の娘の言葉に、ソファに倒れ込んだままの美和は、肩をふるわせながら泣き出した。

　真由美は泣いている母の姿にちらりと視線を送り、すぐにブラウスを脱ぎ、スカートを足もとに落とした。

「早く脱ぎな！素っ裸だぜ」

一馬は不敵な笑みを浮かべて美しい女教師のストリップを眺めている。

「おい、どこへ行く！待ちな」

一馬が静止するより早く、泣いていた美和はリビングから走り去った。

「真由美、ママさんを連れ戻しな」

一馬がすごんでみせる。

「どうぞ、この哀れな生贄を思う存分に嬲ってください」

真由美は媚びを売るようにそう言うと、ベージュのパンストを脱ぎ、次に白いキャミを脱ぎさった。手をブラのホックにかけ、はずした。ぷるんと弾力感のある白い乳房があらわれる。頂きの乳輪は色素の沈着の薄い清楚なたたずまいで、乳首は薄いピンク色だ。すぐに薄いブルーのパンティを下ろし、足首から抜いた。透明感のある裸体を佇立させ、両手を頭の上で組んだ。漆黒の恥毛に飾られた股間さえもむき出しにし、不良学生に惜しげもなく晒している。

　母親の美和の前で嬲られることは耐えがたい恥辱であり、心が壊れてしまう恐怖感があった。母をリビングにつれ戻すことだけは避けたかった真由美は、躾けられている服従のポーズを自らとった。

「乳房！」

一馬の声にすぐに反応して、真由美は胸を突き出した。豊麗な乳房が鑑賞される。

「ふふふ、学校のやつらを招待してやりたいぜ。真由美は学校のマドンナ先生だからな。お前の授業中の尻を見て、男連中はあそこを固くしているんだぜ。服の下にこんな形のいいおっぱいが隠れているなんて知らないだろうよ。」

真由美は戦慄した。想像するだけでおそろしい。一馬は本当にそうするのではないかと思ってしまう。一馬からは破滅を恐れない暴君の匂いがした。

「そんなことされたら･･･わたし、死にます」

真由美は胸を鑑賞されながらきっぱりと言った。精一杯の強がりだったが、この暗く陰湿な秘密が明るみに出れば、本当に命を絶つのではないかと戦慄しつつも思い、同時に母を残してしまうことはできないという思いが交錯するのだった。

「尻！」

真由美は恥辱感にまみれながら後ろ向きになり、臀部を見せる。